

知人が日に幾度となく嫁の愚痴を電話してへる。長い付き合いなのでNOと言えず、受話器を取って傾聴する。夫を亡くしたときに同居を始めたのが悲劇の始まり。何もなくていい良い嫁だったのに、何もさせない過保護が認知症を招いたか。今、何もかも自分でしなければならぬ独居老人が羨ましがられるなんてね。
(名華女)

知らぬ間に体重が4キロ増加していた。甘党ではなかった私だが、レジ付近にあるお菓子を手にするようになったのだ。今日はダメ!と思うつつもレジ待ち中に手を伸ばしているのだ。あそこに陳列するのはNOです。
(すみちゃん)

現在療養中の身である私に、たくさんの薬が処方される。本当に必要なの?と思うけど、自分には断れるだけの知識がない。弱者になるとNOと言えないのが辛い。
(こぼ)

子どもの頃から次に生まれるときは絶対「男の子」と思っていた。就職しても、結婚しても、子育て中も「次は男」と思っ



いた。が、ここ最近、女であることに不自由を感じなくなってきたせいか、はたまた図々しくなったせいか、すっかり忘れていた。今、「次に生まれるときは男がいいか?」と聞かれたら自信を持ってNOと言いた
(チャーミー)

買い物に行くときと突然走り出す2人。またかと思いつつ後を追うと、値段的に絶妙なラインのご希望の品を抱えて熱い視線を投げかけてくる。NOと言つ母と言わない(言えない)父の特性を熟知し、獲物を定めて罾を仕掛けてくる。子どもは賢い。(俺)

△ハモン博士のまとめ

日本人ははっきりと「NO」と言わないことが、どちらかというと美德とされてきた。「NO」は言い切ってしまうは反対や拒絶じゃが、「NO」である理由をきちんと説明できれば、その先に妥協点が見つかり、議論を深める良い言葉になる。最近ハッキリものを言うことを良しとする風潮だからこそ、使い方を間違えんよう、上手に「NO」が言えるようになりたいもんじゃな。



問合せ
大口町NPO登録団体ハモン
☎95-1691

Be Ambitious vol.327

町内にお住まいの
20代の皆さんがリレーで登場!

生き方を変えてくれた演劇部

塚本 葵さん(余野) H10・11月生



高校の部活は演劇部

人前で話す事が苦手なタイプでしたが、入学時の部活動紹介で興味を持ち入部。3年間キャストとして舞台上に上がっていました。振り返ると演劇部に入った事が人生の分岐点になったように思います。

公演は文化祭のほか地区大会やクリスマス公演など、年に数回あり、初めての舞台上では、男子3人で女子高生役を。本番前はすごく緊張していましたが、いざ舞台上に立つと楽しく演じられたことを覚えています。60分程の公演を終えると身体はクタクタ。あまり知られていませんが、演劇部は体力作りも必須で、ランニングや筋トレも日課でした。

ひとつの作品を作っていく過程で、演出について意見が割れることはしばしば。良い作品を作り上げるために、お互いの意

見をぶつけ合いました。準備と練習を積み重ねていくうちに、部内の仲間とより親密になれた気がします。3年生の地区大会では脚本を担当。『不思議の国のアリス』のその後を思い描き、アリスの娘を主人公にした演目はなかなかの評判でした。演劇部を通して

全校生徒の前で演じることが度胸がついたことや、セリフが飛んだ時やアクシデントがあった時に臨機応変に対応してきたことなど、演劇部での経験は自信をつけてくれるのではと思います。現在は、大口町の会計年度任用職員としてコロナワクチン接種の予約対応をしています。今後どの部署に配属されても、頼りにされるような職員になりたいです。



▲文化祭で勇者の役を演じました。